

「1960 年代のマレーシアにおける抽象美術について
—受容をめぐる対話と抵抗—」

石松紀子（長崎大学）

1957 年にイギリスの植民地支配よりマラヤ連邦が独立した後、1963 年に独立国家としてマレーシアが成立し、1965 年にはシンガポールがマレーシアから分離独立する。現在のマレーシアが成立して間もない 1967 年に、7 名のアーティストたちによるグループ展“GRUP”が開催された。参加作家は、チェオン・ライトン（Cheong Laitong）、イブラヒム・フセイン（Ibrahim Hussein）、ジョリー・コー（Jolly Koh）、ラティフ・モヒディン（Latiff Mohidin）、アンソニー・ラウ（Anthony Lau）、サイード・アフマド・ジャマル（Syed Ahmad Jamal）、ヨー・ジン・レン（Yeoh Jin Leng）で、いずれの作家もヨーロッパに留学して美術教育を受けた経験をもつ。この展覧会では、抽象表現を用いた絵画や彫刻が集合的に展示されたため、マレーシアにおける抽象美術の受容を強く印象づけることになる。当時、国際的な視覚言語となっていた抽象表現を用いることで、これまで国内にとどまっていた作品が、サンパウロ・ビエンナーレといった国外の展覧会で展示する機会へとつながっていく。

その一方で、欧米の影響を受けた抽象美術に対する反発も見られる。1968 年にマレーシア国立美術館が主催した展覧会“Salon Malaysia”において、リアリズム絵画を描く半島画家協会、アンカタン・ペルクス・セマナジュン（Angkatan Pelukis Semenanjung）の作家たちが、抽象美術への偏重に抗議を表した。実際、先の“GRUP”展に参加した作家のうち 4 名も、同サロン展において賞を獲得しており、マレーシアにおける抽象美術への関心の高さが伺える。

本発表は、1960 年代の抽象美術の作品を検証しながら、欧米で展開してきた抽象美術がマレーシアにおいてどのように受容され、また影響を与えてきたか、当時の美術の文脈における対話や抵抗を考察するものである。欧米の美術史研究ではアジアの美術を同時代のものとしてとらえる視点が欠落していたため、このような検証や考察をとおして、アジアの美術動向が欧米のそれとどのような連続性を持ち、また断絶していたか相互関係を理解することで、同時代の美術として捉えていくことの重要性を明らかにしたい。